

日時：平成23年1月20日（木曜日） 15時～17時
場所：農林水産政策研究所セミナー室
シリーズ第2回「食料需給セミナー：アフリカの食料需給状況」

一橋大学経済研究所 教授
櫻井 武司氏

講演要旨

コメを中心とした、サブサハラ・アフリカの食料需給動向についてご講演いただきました。冒頭、最近の世界食料価格が高騰する中で、コメは小麦・とうもろこしほど上昇していないこと、アフリカ諸国のメイズ価格の上昇は国際価格の上昇ほどではないことについてご紹介がありました。

1. サブサハラ・アフリカの概要

48の独立国からなり、総人口8.2億人を抱えるサブサハラ・アフリカ諸国全体について、様々な指標により、新興国であるインド、中国との比較分析が紹介されました。

特に、2000年以降、世界金融危機による短期的な落ち込みも含めて、実質GDP成長率が平均5%超と高い伸びを示している要因として、一次産品価格高騰、海外で働くアフリカ人からの送金、中国・ペルシャ湾諸国等からの海外直接投資が挙げられました。

2. サブサハラ・アフリカの農業・食料問題

サブサハラ・アフリカの農業情勢についても、緑の革命以前のインド、中国と比較分析がなされ、都市への人口集中度が高い一方で、可耕地当たり農村人口や農村人口1人当たり穀物生産が、当時のインドの状況に匹敵しています。その上で、サブサハラ・アフリカの食料問題として、生産拡大の余地が大きい一方で、経済成長と人口増加に伴い、都市の拡大、食料需要の増大に対応して、食料輸入が増大しており、これが経済発展の妨げとなっています。輸入の大半

は、都市住民の主食である小麦とコメであり、農村でよく食べられるアフリカ原産のメイズ、ミレット（ヒエ）、ヤムやソルガムと異なり、特に小麦の栽培適地が限定的です。サブサハラ・アフリカの人口の3割が栄養不良であり、20ヶ国で食料援助が必要とされている中で、コメが最も有望な換金作物と考えられます。

他方で、世界的に農業分野のODAが減少する傾向にあり、これがアフリカ農業の生産性が低位で推移している政策的な背景となっています。このため、国際機関の貧困削減策や国際穀物価格の高騰への対応として、「アフリカに緑の革命を」という機運が高まっていると指摘されました。

3. サブサハラ・アフリカでコメの増産は可能か
サブサハラ・アフリカにおけるコメ生産量を10年間で倍増することを目的として、JICA主導により、アフリカ稲作新興のための共同体（CARD）が設立されています。

コメの増産は都市向けの換金作物として行われますが、克服すべき課題として、①他の換金作物よりも有利な条件となること、②農地はあるが増産する農業労働力が不足しており、労働節約的な技術が選択されること、③都市の市場で価格や品質面で輸入米に対して競争力を有すること、④個々の国の国内市場が大きいことから需給バランスが重要であることが指摘されました。

（文責：株田文博）